



# 御堂筋 ものかたり

御堂筋と新御堂筋が交差するエリアは、私の絵画ライフにとって思い出の場所である。今はなき画廊では夫婦合同の初の展示会を開き、また画廊近くにあった画材店の2

思い出に浸りながらアメリカ総領事館前を横切って、大江ビルディングの横を通り、知人の個性が開かれている「マサゴ画廊」に向かった。女主人・古野咲子さんと久しぶりの対面だったが、目が合った瞬間「熱田さんが合った瞬間」熱田さんが「御堂筋ものがたりは見てるわよ」のごあいさつ。うれしい再会だった。お会いする度に話題になるのが、画家・成瀬政博さんとそのご家族の消息。成瀬さんは、週刊新潮の表紙絵を連載されている著名な画家である。

20年以上も前の成瀬さんのエピソードを紹介しよう。成瀬さんの奥さんになられている憲子さんが、マサゴ画廊で個展を開いていたある日、これまで時々来場されていた

## 変わらぬ空間に心が安らぐ

いたが、古野さんは画廊を舞台にして、成瀬さんの作品と人柄の広報に努めた。そして徐々に画業が軌道に乗っていった。そのころ私も成瀬さんを知り、私の会社の女子社員をモデルとして紹介したこともあった。「助けてあげたい」と他人に思わせる雰囲気

気を与えていた。昔、絵を買いにきた店も健在だったのを見て、何かホッとさせられた。変わらぬ空間はたまたまよいを感じ、心安らぐものである。聞くところによると、町の活性化のために骨董市が開かれているという。新しい町づくりを期待したいところである。

成瀬さんを、古野さんが憲子さんに紹介した。彼は近くの裁判所で勤務しながら絵を描く、画家志望の独身であった。シャイな彼は、人に夢を与えたいと熱く語りを始めた。その後、何回かの画廊での出会いが縁となり、憲子さんは結婚を決意された。古野さんは、成瀬さんの人柄と文才・画才に注目し、応援を決意されたという。当時、成瀬さんは絵の傍ら随筆の出版もされて

成瀬さんは持っていたように思う。古野さんは、彼の一途な発展ぶりを見るのを楽しみにしている。長野・安曇野にいる成瀬さんご夫妻から「大阪のお母さん！」と電話があると、わが子のようにとおしく思われてならないという。女主人は今年80歳代に入ったが、「お客様に元気をいただいています」と、眼鏡越しの目を輝かせていた。帰り道に老松町をまわった。美と文化の町、一名書画・骨董の町といわれたこの通りを、久しぶりに歩いた。相変わらず古美術店が目につき、心持ち画廊が減って飲食店が増えていた。夕刻であっただけに飲食店が町に活



成瀬さんは持っていたように思う。古野さんは、彼の一途な発展ぶりを見るのを楽しみにしている。長野・安曇野にいる成瀬さんご夫妻から「大阪のお母さん！」と電話があると、わが子のようにとおしく思われてならないという。女主人は今年80歳代に入ったが、「お客様に元気をいただいています」と、眼鏡越しの目を輝かせていた。帰り道に老松町をまわった。美と文化の町、一名書画・骨董の町といわれたこの通りを、久しぶりに歩いた。相変わらず古美術店が目につき、心持ち画廊が減って飲食店が増えていた。夕刻であっただけに飲食店が町に活